

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2008

課題番号：18791324

研究課題名（和文）唇顎口蓋裂患者の精神状態の分析と満足度に対する研究

研究課題名（英文）Statistical analysis of psychosocial status and satisfaction with facial appearance in patients with cleft lip and palate

研究代表者

那須 和佳子 (NASU WAKAKO)

岩手医科大学・医学部・助教

研究者番号：80282177

研究成果の概要：

口唇口蓋裂患者の経年的心理状態の変化、修正手術前後での自己評価や患者QOL、自尊感情を明らかにするため、体験・満足度とメンタルヘルスに関するアンケート調査を行い統計的検討を行った。結果：患者は幼少期から苦痛な体験を感じ、その体験後に疾患の告知をされる傾向にあること。メンタルヘルスは低下しており、また手術の結果がメンタルヘルスに関与していることがわかった。早期からの心理社会的介入の必要性が示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	33,670	0	33,670
2008年度	1,166,330	349,899	1,516,229
年度			
年度			
総計	2,600,000	349,899	2,949,899

研究分野：形成外科学

科研費の分科・細目：形成外科学

キーワード：心理社会的側面、唇顎口蓋裂、精神状態、満足度、自尊感情

1. 研究開始当初の背景

唇顎口蓋裂患者の治療はチーム医療による治療法へと発展してきたが、その成果については機能的側面と整容的側面から検討することに終始するものが殆どであり、これら治療体系が及ぼす患者の心理的側面の変化、患者の満足度についての十分な検討に乏しいのが実情である。

2. 研究の目的

患者の心理的側面、精神医学的問題点を検討し、医療者側からの医療の提供という一方向性の診療体制に患者側の心理変化、満足度というフィードバックを付加することにより2方向性の診療体系を旨とし、研究結果を今後の治療体系に反映することを目的とするものである。

3. 研究の方法

(1) 対象

対象母集団は、当科で治療中か治療歴がある15～25歳の患者36人および口友会の青年部会員47人であり、合計33人から回答を得た(回収率39.8%)。回答者の平均年齢36歳、男性の割合は36%であった。メンタルヘルスに関する調査に協力を得た国立大学生661人を比較対照群とした。

(2) 調査期間：2006年10月～2007年1月

(3) 評価項目

性別、年齢、疾患の告知状況、顔貌に関する体験や満足度、SF-36・自尊感情 尺度などのメンタルヘルス尺度につき実施した。

(4) 統計解析

患者群と国民標準値および大学生との比較、患者群の体験・満足度とメンタルヘルス尺度との比較について、SPSS Statistics 17.0 および SPSS Text Analysis for Surveys 3.0 を用いた。

(5) 倫理的配慮

①調査協力の任意性、プライバシーの保護について質問票に記入した。②配布および回収は面接にて直接、もしくは郵送の場合は個別の厳封封筒を用いた。③当科で治療中あるいは治療歴のある患者については、面接 あるいは電話で両親の同意を得たのち、本人の同意を得た。④郵送では、質問票への回答をもって調査参加への同意とみなした。⑤本学倫理委員会の承認を得た。

4. 研究成果

(1) 国民標準値(norm-based scoring: NBS)に基づくスコアリングによる患者のSF-36プロフィール

SF-36は健康関連QOLを測定するための尺度であり、身体機能・身体的日常役割機能・体の痛み・全体的健康感・活力・社会生活機能・精神的日常役割機能・心の健康の8つの健康概念が測定される。日本人の

国民標準値に基づいたスコアリングにより算出した患者プロフィールでは、8下位尺度のうち、身体機能が国民標準値より有意に高く、心の健康が有意に低い結果であった。

(2) 患者群と対照群との共分散分析

患者群－対照群間での比較で、年齢と性別に有意差を認めため、これらを共変量として共分散分析を行い、推定平均値を求めたところ、SF-36の下位尺度である社会生活機能とSF-36の得点総計において、患者が対照群より有意に高い結果であった。

(3) 自分の顔貌に対する評価

現在の自分の顔貌に「満足している」36.4%、「どちらともいえない」15.2%、「不満」48.5%と、半数近くが自分の顔貌に不満を持っていた。

(4) 修正手術前後での自己評価

①「自分の顔は周囲の人と比べてどのくらいの容姿であると評価するか」の問いでは、修正手術前と比較し、術後の評価で19.2%に改善がみられ、有意差を認めた。

②「自分は健常人と同じであると思うか」の問いでは、修正手術前と比較し、術後の評価で32%に評価の改善がみられたが、こちらは有意差を認めなかった。

(5) 顔面関連項目のロジスティック回帰分析

顔貌に関連し、i)現在の自分の顔貌に満足しているか ii)二次修正を受けたか iii)修正手術の希望があるか iv)顔貌のことでいやな体験をしたことがあるか v)顔貌のことで不利益を感じたことがあるか vi)経済的に不利益を感じたことがあるか vii)今まで自分が健常人と違うと思ったことがあるか viii)現在自分は健常人と同じであると思うか ix)自分の顔は周囲の人と比べてすぐれているかの9項目を調査し、それぞれの回答結果についてロジスティック回帰分析を行ったところ、現在の自分の顔貌に満足している人は、不満な人に比べて「修正手術の希望がない」というイベントが出現するオッズは97.74倍であった。つまり、現在の自分の顔貌に満足しているものは、修正手術の希望がないという結果であった。

(6) 顔面関連項目とSF-36および自尊感情尺度とのロジスティック解析

MH(心の健康)が1ポイントあがると「今まで顔貌のことで不利益を感じたことがない」とイベントが出現するオッズは1.2倍であった。また、PF(身体機能)、BP(身体の痛み)、GH(全体的健康感)、VT(活力)、SF(社会生活機能)、MH(心の健康)が1ポイント上がると、「今までに自分は健常人と違うと思ったことがない」というイベントが出現するオッズ1.27～1.46倍高

くなっていた。つまり、MH（心の健康）が良い人は顔貌で不利益を感じず、PF（身体機能）、BP（身体の痛み）、GH（全体的健康感）、VT（活力）、SF（社会生活機能）、MH（心の健康）が高いと“自分は健常と違うと思わない”という結果となった。

(7) 疾患の告知状況

疾患の告知状況は40%は親から告知されていたが、21.2%は告知されていなかった。告知のきっかけは、“友だちに言われた”“いじめられた”が16.2%、「告知を受ける前に誰かに指摘されたか」では、「された」が54.5%と半数以上を占め、「指摘された時期」は83.3%が幼稚園、小学校までに指摘されていた。「誰に指摘されたか」では、56.0%が“友達”と回答しており、患者は疾患について告知される前に、幼少期に友達など第三者からの指摘やいじめという形で疾患について認識する傾向にあった。

(8) 顔貌に関する体験

①「今まで顔貌のことでいやな体験をしたことがあるか」では、「ある」が78.8%で、その時期は、「小学校～高校」までで69.6%を占めた。内容は、“いじめ・誹謗中傷”が42.9%、“傷跡について聞かれる・人から見られる”が21.4%であった。

②「今までに自分は健常な人と違うと思ったことはあるか」では、「ある」が63.6%で、その時期は、「物心ついたころ～小学生」が45.4%と半数近くにのぼった。「健常な人と違うと思った理由」は、“発音の違い”“疾患部位が顔であるから”“顎裂部がある”“傷跡がある”などであった。

【考察】

今回の調査で、患者のメンタルヘルスは低下している傾向にあり、また修正手術の結果がメンタルヘルスに関与していることが明らかになった。また、患者は疾患について告知されないまま、発育段階の早期である幼少期に集団生活が始まることで、友達など他者からの指摘やいじめを受けるなどの苦痛な体験により疾患のことを認識し、このような体験がきっかけで告知されている場合が多いという結果であった。集団生活に入る前に、他者からでなく、保護的環境下で保護者や医療者からの告知を受けることが必要と思われる。また、コミュニケーション手段の部位である顔に瘢痕があることや構音障害があることで、患者は“自分は健常な人と違う”という認識を幼少期から持っていた。患者のQOLを高める上で、チーム医療による総合的な治療の重要性が再確認され、また治療と並行して患者本人に対し、幼児期からの継続的な心のケアが必要と思われた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

第33回日本口蓋裂学会総会・学術集会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

那須 和佳子 (NASU WAKAKO)

岩手医科大学・医学部・助教

研究者番号：80282177